

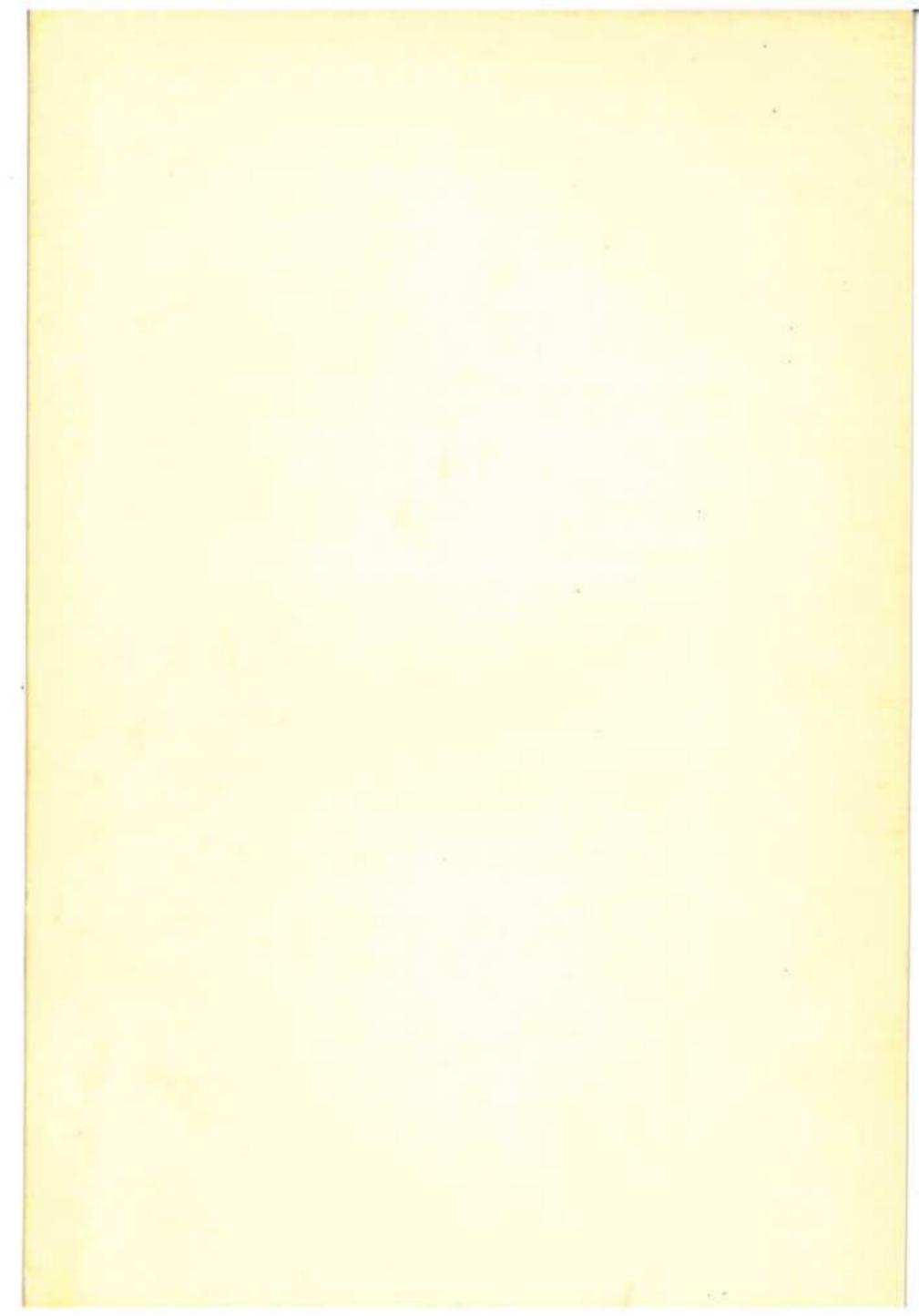
行人塚遺跡

発掘調査概報

1983

掛川市教育委員会

文化係



序 文

掛川市で遺跡の宝庫といわれる和田岡原台地の周辺は、近年茶園の改植が各所で行われ多くの遺跡が消滅の危機に晒されております。特に古墳の周辺には櫛文・弥生時代の遺跡が多く、調査の必要性が叫ばれてきました。

こうしたなかで昭和56年度には、国・県の補助を得て市内遺跡分布調査事業の一環として、行人塚古墳の規模確認の調査が行われ、古墳周辺に弥生時代の集落跡があることが確認されました。

そこで遺跡周辺の地主の方々の協力を得、国庫補助事業として行人塚遺跡の発掘調査を行うことになりました。調査は7月から9月にかけて暑さや雨と戦いながら行われ、十数の住居跡と古墳の前方部と周濠を発見、行人塚古墳が円墳ではなくて前方後円墳であるとの確認を得たことは大きな成果がありました。

和田岡原台地には、行人塚古墳や女高遺跡の他に多くの古墳や遺跡があり、今後所有者の方々と話しあいながら、計画的に調査を実施していく必要があります。

このたびの調査にあたり、ご指導いただいた静岡県教育委員会文化課および調査員ならびに関係者各位に対し深く感謝申し上げる次第であります。

昭和 58 年 3 月

掛川市教育委員会

教育長 伊藤 昌明

例　　言

1. 本書は、昭和57年8月4日から10月30日までに実施された掛川市吉岡字女高1193番地他に所在する行人塚古墳の規模確認、および行人塚遺跡(女高遺跡)の発掘調査概報である。
2. 調査は、昭和57年度市内遺跡分布調査事業および遺跡緊急発掘調査事業として、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が主体となって実施したものである。
3. 調査は、静岡県教育委員会文化課の指導を得て、掛川市教育委員会社会教育課の岩井克允・松本一男が担当して実施した。また、調査には、渡辺康弘氏の協力を得た。
4. 整理作業は、掛川市教育委員会社会教育課で実施した。実測図・写真類の整理および挿図・図版の作成は主に松本があたった。
5. 図面・写真・出土品等の発掘調査資料は掛川市教育委員会社会教育課で保管している。
6. 本調査および本書刊行に関する事務は、掛川市教育委員会社会教育課があたった。
7. 調査および本書を執筆するにあたって、次の方々から協力をいただいた。記して感謝する次第である。
足立順司、植松章八、大橋保夫、加藤賢二、佐藤達雄、佐藤山紀男、篠原修二、鈴木節司、瀬川裕市郎、椿原靖弘、中島郁夫、中西道行、平野吾郎、向坂鋼二、山田成洋、吉岡伸夫、渡辺康弘（五十音順、敬称略）
8. 調査にあたって、土地所有者の鈴木しま、吉岡正象の両氏ならびに周辺の土地所有者、大場寿夫、大場良松、大場浩、山崎金作各氏には文化財保護に対し深いご理解と調査に対する協力が得られた。深く感謝の意を表したい。
9. 本書の土器実測図は、1/5縮尺に統一している。

目 次

序

例 言

I 調査に至る経緯と調査の経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	1
行人塚古墳	
行人塚遺跡	
II 遺跡の環境と層序	5
III 遺構の概要	6
1. 行人塚古墳	6
2. 第1区（第4号住居跡を中心として）	6
3. 第4区（第1号住居跡を中心として）	11
IV 遺物の概要	12
1. 第1区第4号住居跡出土遺物	12
2. 第4区第1号住居跡出土遺物	15
V ま と め	16

挿 図 目 次

第 1 図	位置図	2
第 2 図	周辺環境図	3
第 3 図	基本層序柱状図	4
第 4 図	調査区配置図	7
第 5 図	第 1 区調査区遺構全体図	8
第 6 図	第 1 区第 4 号住居跡実測図	9
第 7 図	第 4 区調査区遺構全体図	10
第 8 図	第 4 区第 1 号住居跡実測図	11
第 9 図	第 1 区第 4 号住居跡出土遺物実測図	13
第 10 図	第 1 区第 4 号住居跡及び、第 4 区第 1 号住居跡出土遺物実測図	14

図 版 目 次

図版 I	周辺景観
	遺跡近景（中央・行人塚古墳後円部）
図版 II	第 1 区（調査前）
	第 4 区（調査前）
図版 III	行人塚古墳全景（西から）
	行人塚古墳全景（北西から）
図版 IV	第 1 区完掘状態（東から）
	第 1 区第 4 号住居跡（西から）
図版 V	第 4 区完掘状態（北から）
	第 4 区第 1 号住居跡（南から）
図版 VI	第 1 区第 4 号住居跡出土遺物
	第 1 区第 4 号住居跡出土遺物
図版 VII	第 1 区第 4 号住居跡出土遺物
	第 1 区第 4 号住居跡出土遺物
図版 VIII	第 4 区第 1 号住居跡出土遺物
	第 4 区第 1 号住居跡出土遺物

I 調査に至る経緯と調査の経過

1. 調査に至る経緯

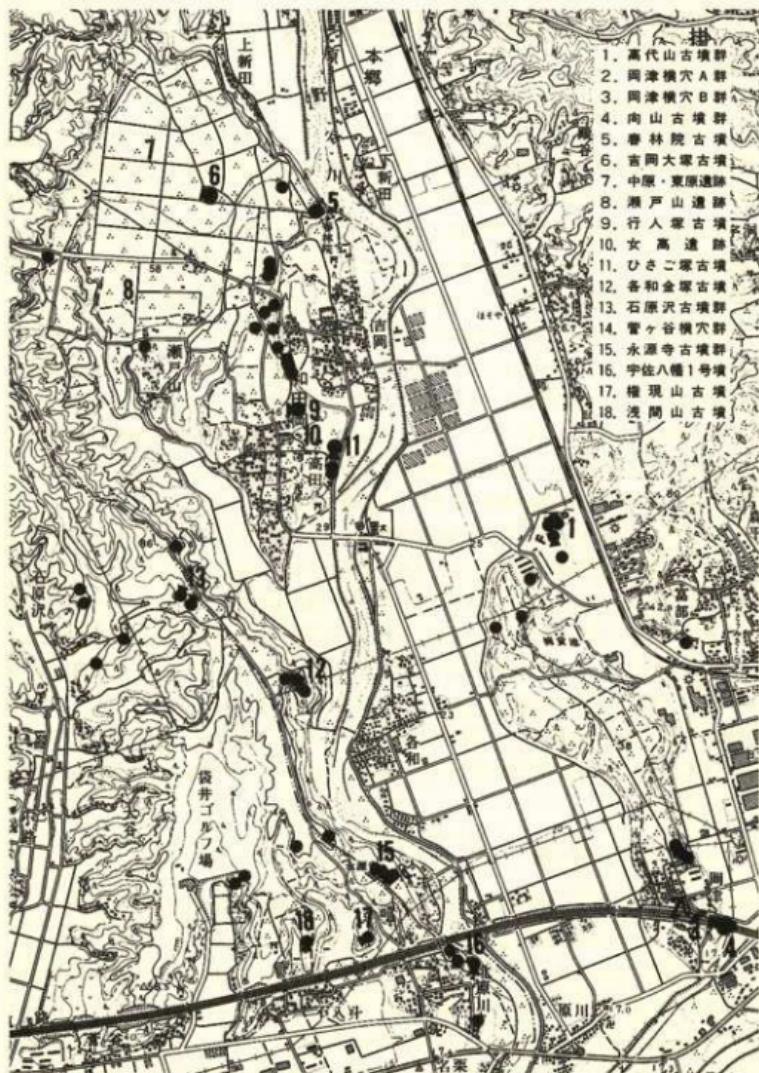
掛川市教育委員会と静岡県教育委員会は、昭和53年度から和田岡古墳群の国史跡指定申請に伴う現状把握と資料収集作業を行なっている。昭和53年度には、瓢塚古墳の測量調査を行ない全長63.0mの前方後円墳であることを確認(『瓢塚古墳』1979)、昭和54年度には吉岡大塚古墳の測量調査を行ない、全長55.0mの前方後円墳であることを確認した(『吉岡大塚古墳』1980)。続いて昭和55年度には各和金塚古墳について調査が行なわれ、全長66.4mの前方後円墳であることを確認している(『各和金塚古墳』1981)。こうした一連の作業により、行人塚古墳を残して、和田岡古墳群の様相が明らかにされてきた。残りの行人塚古墳については、昭和56年度に古墳の規模確認を目的として、古墳の北側・東側にトレントによる発掘調査が行なわれた。この結果、径24.0mの規模を測る円墳であろうとされた。しかし、この時点では古墳西側域及び南側域における状況があいまいであり、なお詳細な調査が必要であるとされていた。この為、今年度においては古墳西側及び南側域での古墳のあり方について発掘調査が行なわれることになった。

ところで行人塚古墳を始めとする和田岡古墳群の多くが所在するこの台地は、和田岡原台地と呼ばれており、昔から遺跡が多数所在していることが知られている。

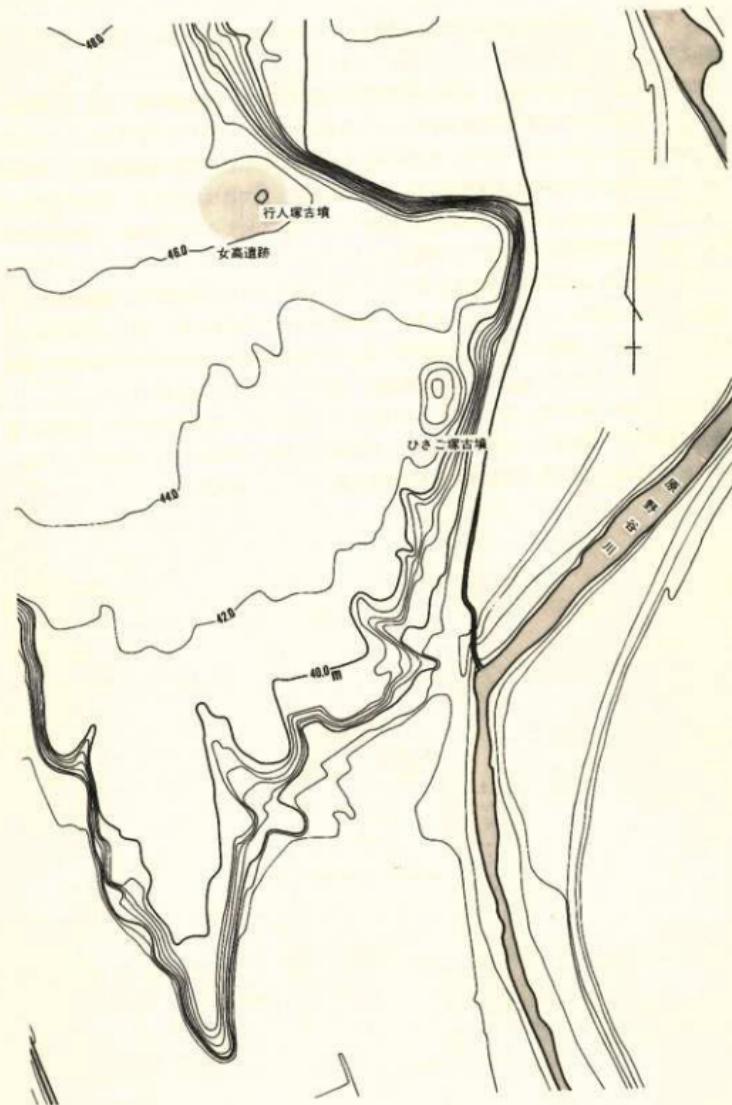
またこの和田岡原台地は、茶どころ掛川市内にあって特に茶の栽培が盛んな地域として知られている台地である。近年、栽培茶は在来茶からやぶきた茶への植え替えが盛んに行なわれており同時に改植事業に伴う遺跡破壊も盛んになってきている。今回調査の対象とされた女高遺跡もその例外でなく遺跡の一部が破壊されるという計画が出された。もしこれを放置すると未調査のまま遺跡の一部が破壊されるということであった。その為掛川市教育委員会では静岡県教育委員会の指導をおおぎ、国・県の補助金を得、そして地主さん達の協力を得て女高遺跡の発掘調査を行なうこととなった。

2. 調査の経過

今回の調査では、調査区を第4図に示した通り、行人塚古墳墳頂部を原点として4分割、一辺50mとする大グリッドを設定し、北西に位置するものを第1区、北東のものを第2区、南東のものを第3区、南西のものを第4区と便宜的に呼称した。さらに各大グリッドの一辺をそれぞれ5m毎に杭を打ち、南北方向に墳頂部原点をAとし北に向って順次B、C、……、H、I、Jとした。そして東西方向の杭は、墳頂部を原点1とし西に向って順次2、3、……、8、9、10とし、各小グリッド名は、各グリッドの南東隅の杭番号をそのまま充てることとした。したがって、古墳墳頂点は第1区(A、1)点であり、その北西に位置するグリッドを第1区(A、1)グリッドと呼ぶことになる。



第1図 位置図



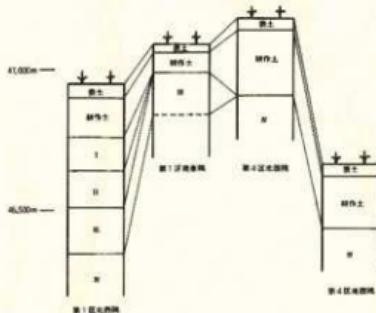
第2図 周辺環境図

ところで、第1区は調査区内周辺に排土置き場がない為に調査区を2分して前後2回に分けて発掘調査することになった。

発掘調査は8月4日から始め、調査区内数箇所に試掘溝を入れ、遺構確認ならびに土層観察を行なった。調査は第1区西側半分を前半分とし、作業員の手による掘り下げを行ない8月10日までに遺構の確認を行なった。そして、8月11日から、第2号住居跡、第3号住居跡及び古墳周溝の掘り下げを始め、本格的に遺構調査に移った。調査区前半分では住居跡7基、掘立柱遺構1基、特殊竖穴状遺構3基の他、土塙・Pit群等を確認し、これらについて全て写真撮影・図面作成等の作業を終え、調査区後半に移った（9月30日）。

今年は例年になく降雨が多く本調査作業においても支障をきたし、頭初掲げた調査計画も大幅に修正せざるを得なかった。その為、第4区における調査は9月6日をもって始め、遺構確認、古墳周溝の掘り下げ、住居跡7基、掘立柱遺構1基、方形竖穴状遺構、性格不明の方形周溝1基の掘り下げを行ない10月23日までに全体の写真撮影、図面の作成等の作業を終え終了とした。

第1区後半分については、前半分埋戻しの後掘り下げを行ない古墳前方部の検出、住居跡1基の検出を得掘り下げを完了、全体の写真撮影、図面の作成等の作業を終え終了とした。そしてこの第1区後半分の終了をもって本調査全体の作業も終了とした（10月30日）。



第3図 基本層序柱状図

II 遺跡の環境と層序

1. 遺跡の環境

本遺跡及び行人塚古墳は瓢塚古墳の北側直線距離にして250m程離れた所に所在する。今回調査の対象となった区域は地籍で掛川市吉岡字女高1188及び1194～1196である。

本遺跡の所在する一帯は、太田川の支流原野谷川が形成した和田岡原台地と呼ばれており、吉岡大塚古墳（第1図6）、春林院古墳（同図5）、瓢塚古墳（同図11）、そして今回調査対象となつた行人塚古墳（同図9）等和田岡古墳群が存在する台地である。また、木台地は原野谷川が形成した河岸段丘によって形成されており、この段丘は大きく二段から成つてゐる。上の段には中原遺跡・東原遺跡（同図7）にみられるように縄文時代・弥生時代の遺跡が多数存在しておらず、下の段に至つては弥生時代・古墳時代を中心とする集落遺跡が展開している。

この他、この台地周辺には遺跡が多く、原野谷川西岸域では、和田岡古墳群のもう一つの古墳各和金塚古墳（同図12）が存在する。この和田岡古墳群は、5世紀初頭と目される大型古墳の金塚古墳から形成され、春林院古墳、瓢塚古墳そして吉岡大塚古墳が続くものと思われる。また和田岡古墳群域には、後期古墳と思われる小円墳が10数基存在していたとのことである。

その他、袋井市域に入ると、北東向きの前方後円墳2基を含む石原沢古墳群（同図13）がある。また各和金塚古墳の南1km程の所、掛川市域には永源寺古墳群（同図15）が、そして袋井市域には菅ヶ谷横穴群（同図14）がある。原野谷川をさらに南へ下ると袋井市域であるが、宇佐八幡神社1号墳がある。そして、その西側300m程離れた所に西向の前方後円墳である権現山古墳（同図17）、さらにその西側150m程離れた所に南向きの前方後円墳浅間山古墳（同図18）がある。

原野谷川東岸の地域に目を転じると上流に長福寺古墳、堂山古墳群等の円墳群があり、これらの周辺には、長福寺脇横穴群、宮坂横穴群、古戦横穴群そして楠ヶ谷横穴群等多くの横穴が存在している。さらに下流に至ると、高代山古墳群（同図1）が存在しており、岡津原台地上には、神明塚古墳、岡津八幡神社古墳等の円墳群が存在する。そして、この岡津原台地にはすでに削平され削減した岡津奥の原古墳があり、この古墳からは、半円方格帯神獸鏡が出土している。岡津原台地をさらに南に下ると岡津横穴A群（同図2）・B群（同図3）があり、その東250m程離れた場所には、向山古墳群（同図4）が存在している。以上見てきたように原野谷川流域には数多くの古墳・横穴が群を成して存在しており、他に先土器時代から古墳時代に至る多種多様の遺跡が折り重なるような形で存在しているのである。

2. 遺跡の層序

本遺跡において確認された土層は第3図に示した通りである。和田岡原台地上に観る基本層序は、本調査区第1区北西隅で観られるように基盤層として、10cm前後の礫を含有する黄褐色

土（第IV層）が存在する。その上に粘性をもちしまりのあるローム層（第III層）が存し、その上にやはり粘性をもちしまりのある暗褐色土（栗色・第II層）、黒色土（第I層）が存在するものである。各土層中に包含される遺物は、関東地方武藏野台地等で確認されるように第II層中に縄文時代のものが、第I層中には弥生時代から古墳時代以降のものが含まれるものである。

尚、本遺跡は原野谷川により形成された河岸段丘の中位段末端部に所在している為もあって、調査区第4区にあっては、表土及び耕作土の直ぐ下に第IV層が露出する結果となっている。

III 遺構の概要

1. 行人塚古墳

今回の調査によって得られた最大の成果は、従来円墳であろうと目されていた本古墳が西向きの前方後円墳であることが明らかにされたことであろう。調査では、主体部の調査を行なったものではないのでその構築時期については不明である。今回の調査では、前方部北側半分及び周溝、そして後円部南西側周溝のみが調査の対象となった。また調査では、前方部上が茶園で墳丘部はすでに削平されており基底部のみ確認するものとなった。

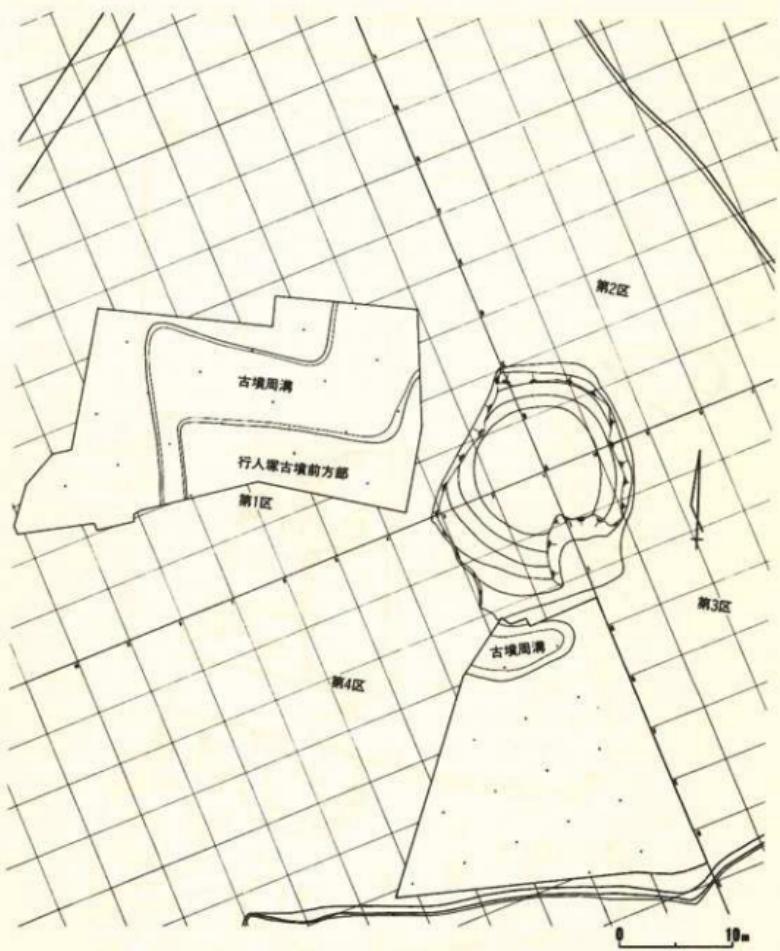
調査によって得られた古墳規模は、全長が約42m、後円部径約24m、前方部長約18mを測るものである。周溝は前方部西側で幅2m、北側最大幅が7mを割る規模をもち、深さは確認面（耕作による削平面）から平均20cmを測り、くびれ部において30cmを測るものであった。また周溝は、後円部南域で溝底が浅くなり、今回確認したレベルでは周溝が跡切れる形で確認されている。

以上が今回調査によって得られた行人塚古墳の特徴である。

2. 第1区

本調査区で確認検出した遺構は、住居跡10基（発掘基數8）で、獨立柱が1基、土塙が7基、その他、性格不明の特殊竪穴遺構2基、Pit多數であった。また古墳周溝北西隅からは、土器・礫等が多数廃棄されたような状態で検出されており、古墳との新旧関係は土層観察から該遺構が古墳よりも古いことが確認されている。本遺跡から確認された遺構の構築時期は、多くのものが弥生時代末期のものである。ただし、古墳周溝内に確認された廃棄遺構については、伴出土器が明らかに古式土師器に相当されるものであり、古墳時代初頭期のものであることが確認されている。

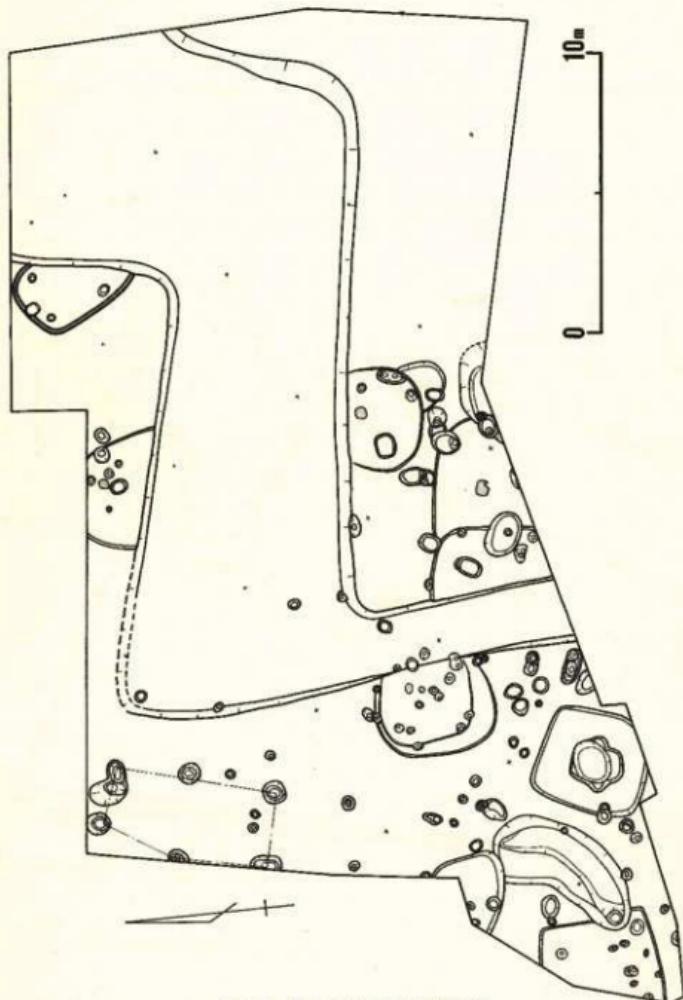
住居跡は、プランの上で2通りに大別される。すなわち、隅丸長方形プランのものと方形プランのものとである。前者に属される住居跡は、3~7号住居跡及び10号住居跡で、後者に属される住居跡は、1・2号住居跡である。炉は、前者プランの住居跡のものほとんどが火皿形態をとるもので焼土が盤状に床面に固く密着していた。後者プランでは、炉またはカマドも検出されるものではなかった。柱穴は、基本として住居跡プランの四隅に位置しているものであったが、2号住居跡にあっては柱穴は確認できなかった。



第4図 調査区配置図

掘立柱造構は、ほぼ2間1間の規模をもつものである。各柱穴では柱痕が確認できなかったが、形状がほぼ同じで有段のものである。柱穴規模は、径35cm～57cm、深さ39cm～59cmを測るものである。尚、本造構の構築時期については作出遺物がなく時期不明である。

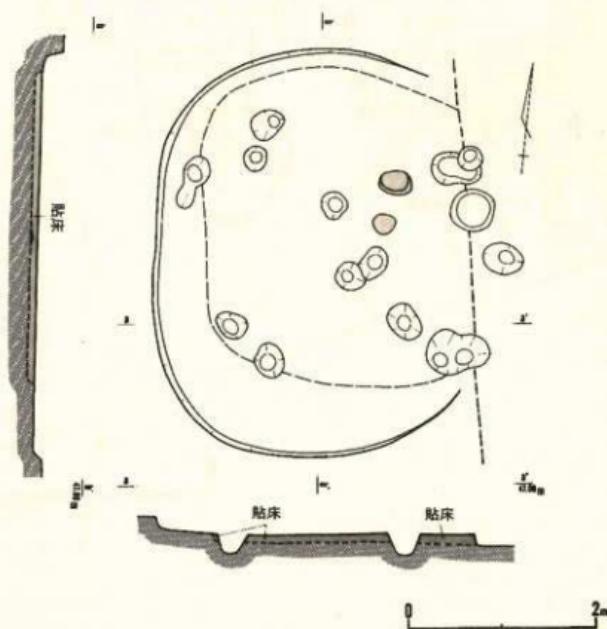
その他の造構については、本報告では割愛し最後に4号住居跡を詳述し次項に移ることとする。



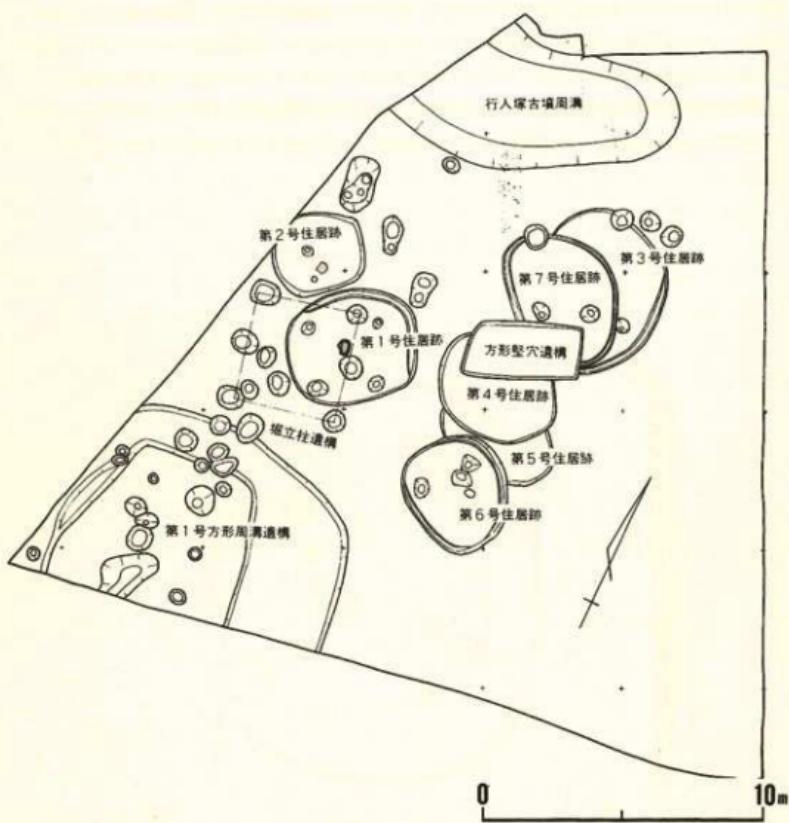
第5図 第1区調査区遺構全体図

<第4号住居跡>

第1区C・D-7区に位置する住居跡でプランはほぼ隅丸長方形を呈するものである。規模は、長径210cmで、住居跡東側部を古墳周溝により擾乱されており短径について定かでないが、160cm以上になると思われる。かは、住居跡中央からやや北寄りの2箇所に検出され、本住居跡は建て替えを行なったことが想定されるものである。柱穴は、4本主柱穴による配置が考えられるものであり、それら規模は径13cm~24cmを測り、深さは18cm~27cmと比較的浅いものである。床面はほぼ平坦面を成しており、ロームブロックを含有する土で固くしまりのある貼床面が確認された。貼床面の厚さはほぼ5cmで住居跡中央長さ170cm、幅130cmの範囲に形成されるものであった。尚、本住居跡の構築時期は、出土遺物（第9・10回掲載）から弥生時代終末期にあたるものと思われる。



第6図 第1区4号住居跡実測図



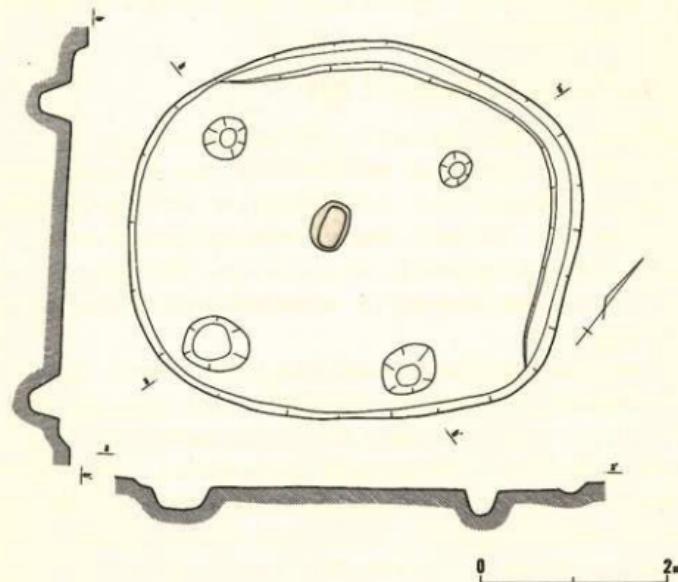
第7図 第4区調査区遺構全体図

3. 第4区

本調査区で確認検出した遺構は住居跡7基、掘立柱遺構1基、方形堅穴状遺構1基、土塙6基（このうち3基が近世土塙墓）、そしてPit状遺構が調査区南西隅に集中して確認されている。この他、主体部が明確でない為性格不明の方形の周溝を巡らす遺構が調査区南西隅で1基確認されている。

住居跡は基本プランとして第1号住居跡に観られるように長方形プランを呈するものである。炉は、第1区検出の住居跡に観られるように火皿形態をとるものであるが、その多くが後世の茶根による搅乱を受けており、明瞭な形で確認できるものではなかった。柱穴も基本として住居跡四隅に位置するものと思われるが、明瞭に確認できたものは第1号住居跡のそれであった。また、本調査区で検出した住居跡中には、周溝を巡らす住居跡が第1・3・6・7号住居跡において確認されているがそれらは住居跡を一周するものではなく部分配置のものであった。各住居跡の構築時期は第1号住居跡出土遺物（第10図9～12）に見られるように弥生時代後期である。

掘立柱遺構は6本構成のはば1間四方の規模である。各柱穴は、径35～52cmを測り、深さは60～67cmの規模をもつものであるが、柱痕は確認できなかった。時期については伴出遺物が土器小破片で不明である。



第8図 第4区第1号住居跡

その他の遺構については、本報告では割愛することとし、次に第1号住居跡について詳述してここでその項を閉じる。

＜第1号住居跡＞

第4区F-3・4区に位置する住居跡で、プランは隅丸長方形を呈するものである。規模は長径240cm、短径205cmを測り深さは確認面から15cm程を測るものである。炉は火皿形態をとるものであるが部分的に搅乱を受けており形状が不定形となっている。柱穴は4箇所確認しており、それらの規模は径16~30cmを測り深さは21~35cmの規模を測るものである。また本住居跡東壁際から北壁際にかけて幅15cm、床面からの深さ平均5cmの周溝が部分配置されている。尚、本住居跡の構築時期は、出土遺物(第9・10図掲載)から弥生時代後期に相当するものと思われる。

IV 遺 物 の 概 要

本調査によって得られた遺物の量は、54cm×34cm×20cmのポリコンテナで20箱強であった。その多くは、弥生土器片であり、時期もほぼ第9・10図に示した時期のものであり、他に古墳前方部周溝北側部から検出された小型壺にみられるような古式土器。そして、第4区で発見した六文銭として使用された寛永通宝銭である。ここでは、すべてのものに触れることができない為、第1区第4号住居跡及び第4区第1号住居跡から出土した遺物についてのみ、その特徴を述べることにする。

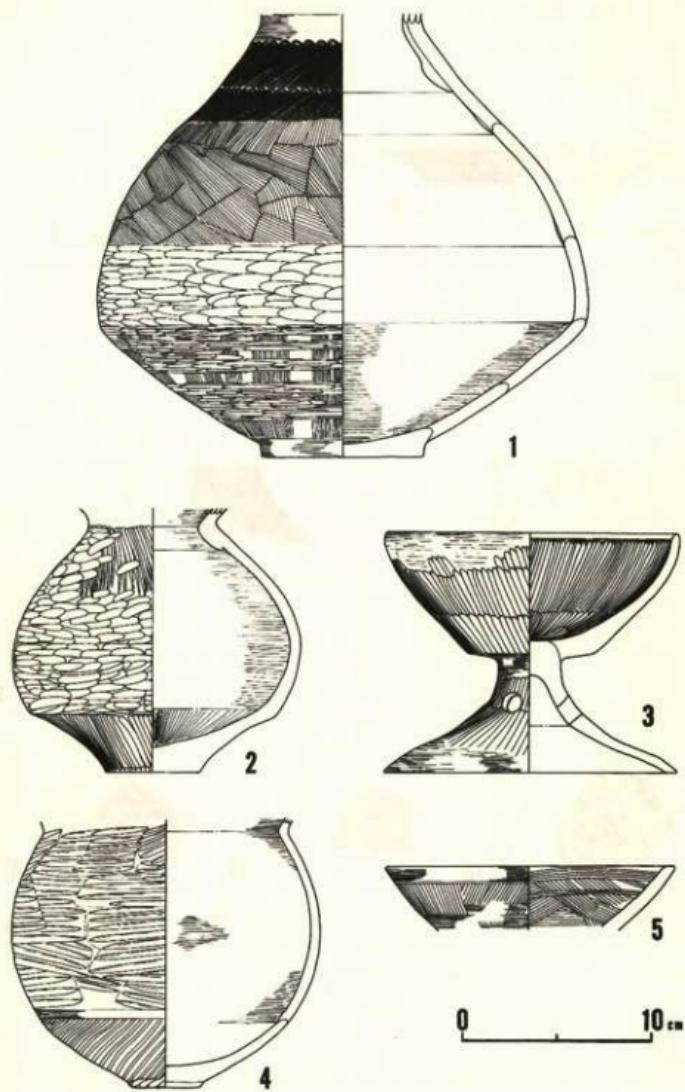
1. 第1区第4号住居跡出土遺物

本住居跡から出土した土器は、第9・10図1~8に示した遺物がその主なものである。

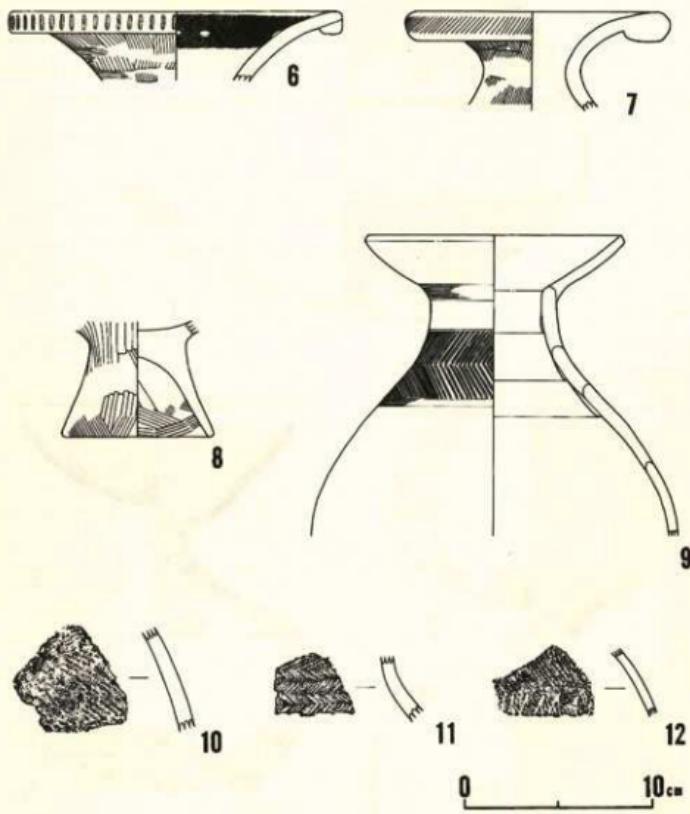
1は、口縁部については不明であるが、胴部の最大径がおよそ26cm、器厚7cmを測る壺形土器である。胎土の色調は褐色を呈しており、胎土中に石英粒を含有し緻密であり、焼成も良好な土器である。土器表面には、肩部に繩文を両端を結んだ結び目繩文を横位回転させ施文しており、胴部上部には、刷毛目による調整が施され、その下部においては、丁寧な範磨きや、そして胴部くびれ部から底部までの範囲は刷毛目調整の後、横方向に範磨きが施されている。内壁には、横方向のナデが施されている。

2は、口縁部を欠損する胴部最大径15.8cmを測る壺形土器である。胎土は、色調が褐色を呈し緻密であり焼成も良好である。土器表面は肩部を刷毛幅が太い刷毛で調整した後、丹念に範磨きを行ない仕上げている。胴部下半から底部にかけても縱方向の範磨きにより仕上げている。

3は、半分程欠損しているが、全体を知り得る器高12.9cmの高壺である。胎土は褐色を呈し緻密で焼成もよい。壺部口径は15.2cmを測り、壺部下底部で明瞭な稜をもつ。口縁部に向かって緩く内湾する。脚部は、径15.5cmを測り、壺部との接合部から外反し、末端部近くで内側に湾曲する。器面は、壺部・脚部ともにナデ調整の後丹念に範磨きによる仕上げがなされている。壺部口唇部は範削りが観られるものである。



第9図 第1区第4号住居跡出土遺物実測図



第10図 第1区第4号住居跡及び第4区第1号住居跡出土遺物実測図

4は、口縁部を欠損しているがおそらく、くの字状に屈曲する単口縁となる。胎土は暗褐色を呈し金雲母を含有するものである。胴部最大径が16.4cmを測る。底部は粘土を貼り付け気持ち平底を呈しているようである。器面は、叩きが施こされており、下副部には斜方向に叩きが観られる。

5～7は、壺形土器の口縁部破片である。5は、内外面に刷毛による調整後、外面では横ナデにより仕上げている。6は、口縁部に粘土を貼り付け、口唇部に面をもたせている。内面に繩文を横方向に施文後、円形の浮文を貼り付けている。また外面には、籠状の工具により刻目を施すものである。頸部は刷毛による調整の後、ナデが施こされている。7は、口縁において粘土を貼り付け口唇部に面をもたせている。外面には明瞭でないが刻みが施こされているようである。また、頸部は刷毛による調整の後ナデが施こされている。

2. 第4区第1号住居跡出土遺物

第4区は、全体に畑耕作による削平が激しく包含層が薄く出土遺物も少なかった。したがって、ここに示した遺物が本住居跡からの出土品のはほとんどであると言ってもよいものである。

7 8は、胴下半部及び胴部平面を欠損する壺形土器である。口径13.8cmを測り單口縁を成す。胎土は、色調黄褐色を呈し石英粒を多量に含み、焼成が悪く全体がボロボロしている。器面はナデによる調整が施され、肩部は籠状工具による羽状の刺突が成されている。

10～12は、本住居跡出土の土器破片拓影図である。10は、色調褐色を呈し砂粒状の胎土で焼成も悪くサラサラしている。器面は櫛状工具により波状文が施されており、下部は繩文が施こされている。11は、暗褐色を呈す焼成のあまりよくない胎土の土器片である。器面には櫛状工具による刺突文が施こされ、また下には櫛状工具による羽状刺突がみられるものである。12は、胎土褐色を呈し荒いが焼成がよいものである。器面には刷毛目が施こされた後、棒状工具により歯状（コンバス文状）に沈線がみられるものである。

以上、本遺跡から出土した遺物のうち、第1区では第4号住居跡から、第4区では第1号住居跡からの出土土器を概略した。第1区第4号住居跡では、從来菊川式土器の範囲で扱かわれている1、6土器と伴出する形で、新しい様相の土器2、3が出土しており、さらに幾内で観られるような叩き目が施こされる4などが観られる。2、3などを観ると古式土師器的な時期も想定されようが、S字状口縁を成す土器片も出土しておらず全体的に半断すると弥生時代最終末に相当する時期のものであると思われる。

V ま と め

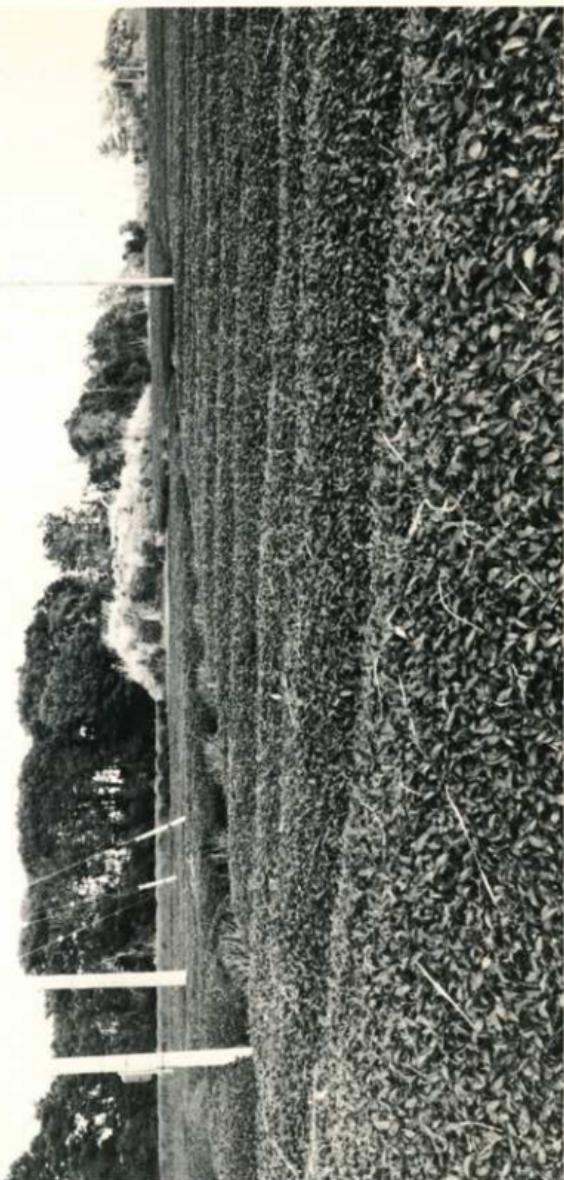
以上述べた通り、本調査では從来知られてきた事の再確認をするとともに、いくつかの新たな事実が判明した。資料の整理が充分に実施されていない為、不明確な部分が多いが、調査の成果を再度簡単に述べまとめてとする。

- (1) 行人塚古墳は、全長42.0m、後円部径24.0m、前方部長約18.0mの規模をもつ、西向きの前方後円墳であることが判明した。
- (2) 行人塚遺跡（女高遺跡）に関して述べれば、本遺跡は弥生時代後期を中心として古墳時代初頭期まで展開した集落遺跡である。
- (3) 集落のおよぶ範囲は、第4区で検出した住居跡群を集落の東限として西側部を中心をもつ集落であることが想定される。
- (4) 本調査区内で検出した遺構の配置状態をみると、本集落では生活域と墓域とが相接する形で確認されており、集落構造を考える上で好資料と成りうるものと思われる。
- (5) 本調査区内では、弥生時代集落跡、古墳が存在する他近世土塙が3基確認されており、本遺跡が近世に至って墓域として使用されていたことが判明した。

図版
II



遺跡近景（中央 行人壕古墳後円部）



図版
II

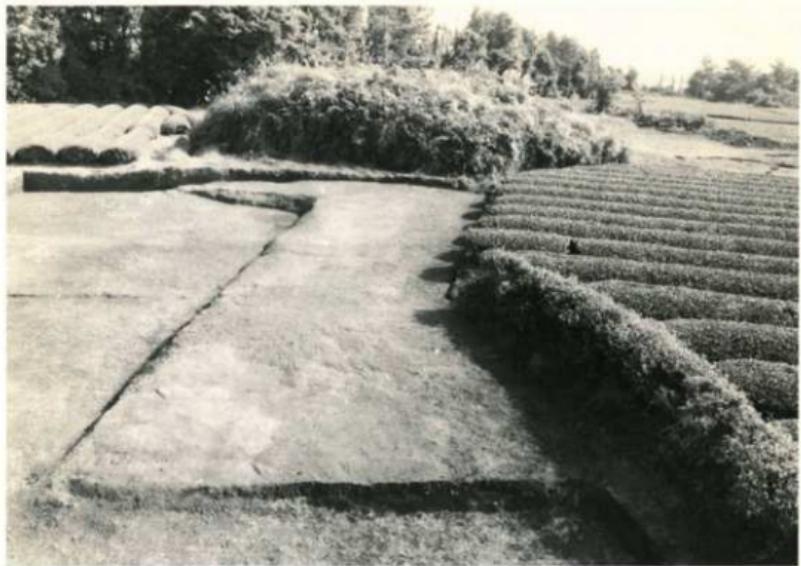


第1区（調査前）



第4区（調査前）

図版
III



行人塚古墳全景（西から）



行人塚古墳全景（北西から）

図版
IV



第Ⅰ区完掘状態（東から）



第Ⅰ区第4号住居跡（西から）



第4区発掘状態（北から）



第4区第1号住居跡（南から）



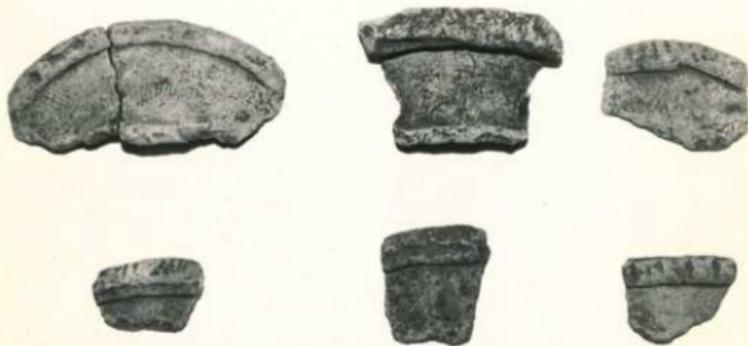
第1区第4号住居跡出土遺物



第1区第4号住居跡出土遺物



第1区第4号住居跡出土遺物



第1区第4号住居跡出土遺物



第4区第1号住居跡出土遺物



第4区第1号住居跡出土遺物

行人塚遺跡発掘調査概報

昭和 58 年 3 月 31 日

編集 掛川市教育委員会

発行 掛川市教育委員会

印刷 静岡市豊田3丁目5番30号

株式会社 三 則

TEL 0542-82-4031

